

第 252 回研究報告会 (9月 20 日)

ほこりの説き分け考

安井幹夫

最近、親神の十全の守護とほこりの説き分けについて関心が高まってきている。こうした状況にあつて、改めて考えてみたいことは、ほこりの教説におけるそれぞれのほこりについての説明(説き分け)である。ほこりの教説は、かしまのかりもの教理とともに、教えの根幹をなす。

明治 14 年 9 月 18 日付で、山澤良治郎は止宿人届の手違いから「就御尋手続上申書」を警察に提出している。その中で「病氣ト云ハ更ニ無之候得共人間ハ日々ニ貪惜憎可愛恨シイ立腹慾高慢此ハツノ事有故…」と述べている。ただその説き分けは記されていない。それは提出書類という性格であるからともいえるが、同じく山澤の手になる「こふき話」—和歌体 14 年本においても、「にんげんにやまいとゆうてなけねども こゝろちがいのみちがあるゆへ このみちハぶんぶこゝろにハツあり ほしをしいとかはいにくいと うらめしとはらだちよくとこふまんと これがハツのこゝろちがいや」(109～111)と記されているのみで、その説き分けはない。それはおそらくおやさまがお話になっていないからと推測される。

また『稿本天理教教祖伝逸話篇』130 に、高井直吉がおたすけ先で、身上患いについて話しをしていると、先方は「わしはな、未だかつて悪い事をした覚えはないのや」と喰ってかかってきた。そこで、おやさまに伺つてくると走って帰り、ほこりの話を聞かせていただいている。そこでも、その説き分けがなされている様子はいかがかえない。

とすると、いつ頃から説き分けがなされるようになったのか。明治 23 年 1 月 13 日夜に、「初席の者は会長と事務所一人、先生方一人、三人立合の上、身の内御話し八つの埃の理を説かせ試験をする事…」という願をもつて、ここに「初試験」が実施されることになった。つまり別席を受ける以前に、身の内の守護、八つのほこりの説き分けを話すことができなければならない、ということである。しかも、本部での初試験に合格するために、それぞれの教会においても、同様の試験が実施されるようになるので、少なくとも 3～5 回の試験を終えて、初席を迎えるということになるだろう。したがって、別席を運び、おさづけの理を拝戴した人誰でもが、ほこりの説き分けを人に話すことができた、ということである。

大正 15 年 4 月発行の『初試験』という冊子がある。また昭和の初期には『守護と埃—はつしけん』と題された折本がある。それらと比較するとき、語尾などに若干の違いはみられるが、その内容はほとんど同じであり、当時の初試験の内容をうかがい知ることができる。その説き分けは次のようである。

〔ほしい〕と申ますと、価をもつて、ほしいはよろしいなれど、働きもせず、価をも出さずして、ほしがる心の理が埃となります。

〔をしい〕と申ますのは、すたるものを、をしむはよろしいなれど、出しをしみ、骨をしみ、等が埃となります。

〔かはい〕と申ますと、へだてのない可愛はよろしいなれど、身鼯、身勝手、等がほこりとなります。(以下略)

非常にシンプルである。けれども、これが別席のお話になると、もう少し具体的になってくる。分量も増える。ただし別席台本ができるまでは、必ずしもほこりの説き分けがなされていたかどうかは、よく分からない。地方の教理文書に、別席のお話を記したものがいくつかある。幡多文書はその一つである。この記録によると、明治 26 年 6 月 11 日の高井先生口授に、ほこりの説き分けがみられる。しかし、こうした例は少ない。それは、ほこりの説き分けは自明のことであるから、あえて記していないとも考えられるが…。

グローバル誌上で紹介した、他の文書の中にも、ほこりの説き分けが記されている。それらを振り返るとき、その説き分けが一定ではないことに気がつく。簡単なものからかなりの分量をもつものまである。それは、ほこりの説き分けに定まったものがあるのだろうか、という問を生起させるが、その点については、『信者の栞』に、ほこりとして挙げられた心遣いは、理の角目を仰せられたもの。ほこりの心、行いは幾千筋あるとも分からない。それ故、ほこりの心、行いを一々挙げることは、なかへ出来得ない(23 頁参照)、と述べられている。

そこに、『天理教教典』に、ほこりの説き分けが記されていないことの意味を求めることができるかも知れない。

第 11 回教団付置研究所懇話会・年次大会

深谷忠一

2012 年 10 月 5 日、滋賀県大津市坂本の天台宗宗務庁大会議室において、第 11 回教団付置研究所懇話会・年次大会が開催された。当日は 19 の懇話会会員研究所及び 6 つのオブザーバー研究所から 100 余人の参加があり、本教からは、教庁の岩田総務部長、柏木総務部員と筆者が参加した。

今回の年次大会においては、「大震災と宗教」というテーマのもとに、東日本大震災より 1 年半を経た今の日本社会の動向を踏まえ、キリスト教系の NCC 宗教研究所、真宗大谷派教学研究、真如苑の宗教情報センター及び日蓮宗現代宗教研究所の各代表から、それぞれの教団の取り組みについての発表が行われた。

本研究からは、先頃出版した『東日本大震災における天理教の救援』を提供し、参加者からの好評を博した。

日本南アジア学会第 25 回全国大会に出席

堀内みどり

10 月 6 日、7 日、東京外国語大学府中キャンパスで開催された標記学会に出席した。

日本と南アジアを取り巻く環境における激動の変化は過去のどの時代とも比較にならないという認識に立ち、日印国交樹立 60 年である 2012 年を、政治・外交・経済・情報・知識・文化の領域における日本と南アジアを軸にした未来への展望を考える機会として捉え、全体シンポジウムは「日本と南アジアの交流—モノ・知」をテーマとして企画された。「天竺・印度・インド—近世から近代へ」など 5 人の発題があった。

第3回 宗教と環境シンポジウム

新しい文明原理の生活化と宗教 II

2012年 11月10日(土) 13時00分～16時50分
 おやさとやかた南右第二棟・陽気ホール (天理市守目堂町 252)
 アクセス:JR 及び近鉄天理駅から東へ徒歩約20分、タクシー等で約5分

主催 宗教・研究者エコイニシアティブ (RSE)
 共催 東洋大学 国際哲学研究センター (IRCP)
 後援 奈良県宗教者フォーラム、
 天理大学、天理大学おやさと研究所

- 13:00 オープニング / 飯降政彦 (天理大学 学長)
 記念メッセージ / 松長有慶 (高野山金剛峯寺 座主)
- 13:25 基調講演
 すべての生物は「サムシング・グレート」からの贈り物
 / 村上和雄 (筑波大学 名誉教授)
- 14:30 パネル発表
 ◆ 東日本大震災から支えあう社会へ～持続可能な社会に向けて
 次世代へバトンを渡す責任～ / 稲場圭信 (大阪大学 准教授)
 ◆ 「鳥翼風車発電機」開発と宗教的イニシアティブ
 / 佐藤隆夫 (いって研究所 代表取締役)
 ◆ 食料・環境問題の解決の一助となるフードバンク活動について
 / 井出留美 (カドハーベスト・ジャパン 広報・プロジェクトマネージャー)
- 15:45 パネルディスカッション
 環境行動と「共生 (ともいき) へのみちのり」
 / コーディネーター 岡本享二 (環境経営学会副会長)
- 16:40 クロージング / 西山茂 (RSE 副代表・東洋大学 名誉教授)
 16:45 次会場校挨拶 / 武田道生 (RSE 運営委員・淑徳大学 准教授)

昨今、身の回りのみならず世界各地から大旱魃や大洪水、熱波や寒波など、温暖化由来の異常気象が頻繁に報告されています。

しかし例えば、「近い将来に」と予測される北極海氷の全面融解が、周極圏にとどまらぬ中・低緯度も含んだ地球規模の「熱暴走」を呼び起こすこと、さらにそれが広範かつ修復困難な生態系崩壊をもたらすことはご存じでしょうか。

かかる危機的状況のさなか、昨年は3.11 東日本大震災と福島第一原発の事故をわれわれは経験しました。

経済的得失はともかく、国民の間に、自然と人間とが調和する持続可能な社会づくりへの機運がますます高まっているのは間違いないところです。

これをうけ、長く沈黙していた伝統宗教界も、あらたな「生命観」「倫理観」に基づく環境問題への取り組みに踏み出そうとしています。まさにこの時、宗教者と研究者の協力・提携で、破局回避のための新しい文明原理の構築と、その具体的なアクション・プランが発動されねばなりません。

設立2年目となる私ども「宗教・研究者エコイニシアティブ」では、来る11月10日、天理市において第3回宗教と環境シンポジウムを開催する運びとなりました。

昨年と同じサブテーマのまま「II」と付けたのは、今年は「生活化」「共生 (ともいき)」「利他」といった昨年からの各論の深掘りに向かい、さらに具体的環境行動の縁 (よすが) としてほしい願いによるものです。(文責 RSE 事務局)



グローバル天理
 第13巻 第11号 (通巻155号)

発行者 深谷忠一
 編集発行 天理大学 おやさと研究所
 〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

2012 (平成24) 年11月1日発行

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

© Oyasato Institute for the Study of Religion
 Tenri University

Printed in Japan